

日本語の助詞「ね」の機能と語用論的曖昧性

中 村 渉

This paper proposes that the notoriously diverse behavior of the Japanese sentence-final particle *ne* arises pragmatically from an interaction between the single meaning of *ne* and the linguistic and/or situational context in which it occurs. It argues specifically that every use of *ne* involves a semantic structure in which the speaker and hearer share a common ground and that the alleged diversity of *ne* is attributable to what the speaker and hearer construe in addition to their common ground.

キーワード：終助詞、間投詞、談話辞、認知文法、主体化

1. はじめに

日本語の文末に現れる「よ」、「ね」は、伝統的に終助詞として分類され、前者は「念押し」、後者は「確認」という基本的意味を持つとされてきた。近年は「よ、ね」が談話内で果たす多様な機能を、話し手と聞き手の相互作用の観点から分析する傾向が強まっている(宇佐美 1997, Tanaka 2000, Morita 2002, Onodera 2004, Lee-Goldman 2005)。ただし、これらの研究が探求した「よ、ね」の多種多様な語用論的機能や談話内での戦略的な使用を、伝統的な研究(大曾 1986, 神尾 1990, 益岡 1991)が正しく言い当ててきた「よ、ね」の基本的意味から、どのように派生するかという課題が依然として残されていることも事実である。

本稿は、紙幅の関係から「ね」の分析に重点を置くが、次のように構成されている。第2節は冒頭で触れた2つの研究の流れを概観し、宇佐美(1997)が提案した「ね」の機能的分類を要約・検討する。第3節は Sweetser(1990)が提案した英語の従属接続詞の分析を要約する。従属節の修飾対象を3つの領域に分ける Sweetser の提案は本稿の提案の基礎を構成する。第4節は「ね」の多機能性は単一の語義の意味と文脈の相互作用の結果であると提案した上で、宇佐美が提示した「ね」の機能的分類は「ね」の語用論的曖昧性の反映であることを指摘する。第5節は「よ」も「ね」と同じ手法で分析することが可能であることを示唆

する。第6節は結論である。

2. 終助詞研究の2つの流れ

「情報のなわばり理論」を提案した神尾(1990)は、終助詞「ね」については、主に話し手の聞き手に対する協応的態度を表す標識であると分析している。協応的態度について、神尾(1990: 71)は、与えられた情報に関して、聞き手が話し手と同一の認知状態を持つことを積極的に求める態度であると述べている¹⁾。

一方、終助詞「ね」と「よ」の意味的対立に着目し、言語形式の内在的意味と表現効果を峻別することを提案した大曾(1986)を承けて、益岡(1991)は、話し手が自分の知識・意向が聞き手の知識・意向と一致する方向にあるか、対立する方向にあるかを判断して相補的に使い分けていると主張している。具体的には、前者の場合(益岡の用語を用いると、「一致型の判断」)には「ね」が用いられ、後者の場合(「対立型の判断」)には、「よ」が用いられることを、益岡(1991)は予測する。例えば、以下の例文(1a)は、話し手が聞き手と命題部分の認識を共有していることを反映して用いられているが、(1b)は話し手が聞き手と命題部分について認識を共有していないことを反映して用いられているというのが益岡の議論の主旨である(益岡1991: 96)。

- (1) a. お島って変わった名ですね。
 b. お島って変わった名ですよ。

「ね」の基本的な機能を情報の共有化・一体化と見なす伊豆原(1993)も、大曾(1986)、神尾(1990)、益岡(1991)とほぼ同列に位置づけることが可能である。

話し手と聞き手の認知状態の一致/不一致に注目した神尾(1990)、益岡(1991)とは対照的に、メイナード(1993)は「情報量」概念に基づいて、話し手が聞き手に比べてより多くの情報を所有している場合は「よ」が、聞き手が話し手と同じか、それ以上の情報を所有している場合には「ね」が使われると述べている。メイナードの提案は、益岡(1991)が想定した「一致型の判断」⇔「対立型の判断」の相補的対立を話し手と聞き手の持つ情報量の相対的差として言い換えたものであると言ってもよい。

「ね」の意味の最大公約数的分析を提案した神尾(1990)、益岡(1991)、伊豆原(1993)、メイナード(1993)とは対照的に、宇佐美(1997)は、話し手・聞き手の認知状態に注目した従来の研究では看過されがちな例文の検討に基づき、「ポライトネス」(Brown and Levinson 1987)の視点を踏まえて、(2)のように「ね」の機能を「会話促進、注意喚起、発話緩和、発話内容確認、発話埋め合わせ」の5つに分けることを提案している²⁾。各用法の例文は宇佐美(1997: 249-253)から採ったものである。

- (2) a. 会話促進 (相互作用の用法)
 例：①飛行機酔う人ってあんまりいないよ^ね。
 ②あの一、年にいっぺんぐらいしか書かないんだよ^ね、あの人^ね。
- b. 注意喚起 (話し手中心用法)
 例：①でもね^え、九州もわたし^ね、長崎は一回行ったんだけど。
 ②ほんとに速読する人は^ね、岩波新書は^ね、2時間で
 読まなきゃいけないんだよ^ね。
- c. 発話緩和 (聞き手中心用法)
 例：①まだ一、あの一、長女が23才なんです^ね。
- d. 発話内容確認
 例：①えーと、それから250も、今日、初めてでございますよ^ね。
 ②えーと、じゃあ、いちよ、ちょっと、説明したほうがいいですよ^ね。
- e. 発話埋め合わせ (話し手中心用法：フィラー)
 例：①えー、にゅ、入稿はです^ね、2回ぐらいに分けたいとゆうふうに思っております。

(2a) の「会話促進」用法は、話し手と聞き手の情報共有を前提とした「ね」の基本的用法であり、「あなたと同じような考えである」ということを表明する結果として、会話を促進する機能を持つと宇佐美は述べている。この「相互作用の用法」は「確認」又は「一致型の判断」(益岡 1991) と従来呼ばれていた用法に相当している。

(2b) の「注意喚起」用法は、話し手が聞き手を自分の話題に引き込むため、自分の発話を強調し、聞き手の注意を喚起する用法であるが、聞き手が話し手と情報を共有しているという前提が不要とされる点で「話し手中心用法」であり、文末に加えて、語末及び句末にも頻繁に出現すると宇佐美は述べている。

(2a,b) の用法とは対照的に、(2c) の「発話緩和」用法は、聞き手が知らない話し手が考える情報を提供する場合にも使われる点で「聞き手中心用法」であり、聞き手と情報を共有する可能性を示唆することにより、発話を緩和する機能を果たしていると宇佐美は述べている。しかし、(2c) の用法は、聞き手が知らない話し手が想定する情報を伝達する際に使われる点で話し手中心用法と見ることもできる一方、話し手が聞き手に確認する代わりに自分の判断の妥当性を自身が改めて確認している作業の最中であるとも解釈できる (田窪・金水 2000)。(2c) を話し手⇄話し手の自省的相互作用の表現と考えるなら、(2a) の相互作用の用法の下位タイプと考えることができる³⁾。

更に、(2d) の「発話内容確認」用法は、話し手が自分の発話内容に自信が無い時に聞き手

に確認を行う用法であるとされている。宇佐美は、発話内容確認用法が、相互作用の用法、話し手中心用法のどちらに属するかについて明言していない。発話確認用法の「ね」の位置づけについての検討は本節では行わず、第4節まで延期する。

最後に、(2e)の「発話埋め合わせ」用法は、話し手が発話中に不確実な言語表現のために言い淀んだり、次に述べることを考えている時に時間を稼ぐために挿入されるフィラーとしての用法である。この用法は、宇佐美(1997)によれば、「です」と共に、フィラー表現「です」の一部として使われ、単独では用いられない。宇佐美は、発話埋め合わせ用法は、話し手中心用法に属する注意喚起の「ね」が、より改まった場面でも使えるように敬体「です」がついて、丁寧度が高まると共に慣習化したものであると述べている。以上の宇佐美の観察を踏まえれば、(2e)の用法は(2b)の用法と共に話し手中心用法として統合することができる。

宇佐美(1997)が提出した「ね」の機能に基づく分類及び本稿の再分類をまとめると、表1のように整理することができる⁴⁾。

表1：「ね」の機能的分類

	宇佐美(1997)の分類	本稿の再分類
1. 会話促進	相互作用の(生起位置:文末)	相互作用の
2. 注意喚起	話し手中心(生起位置:語末・句末に類出)	話し手中心
3. 発話緩和	聞き手中心(生起位置:文末)	相互作用の
4. 発話内容確認		
5. 発話埋め合わせ	話し手中心(生起位置:「です」の直後)	話し手中心

宇佐美(1997)は、終助詞「ね」の内面的意味を主な考察対象とした先行研究(大曾1986, 益岡1991)を批判し、「ね」の「運用面におけるコミュニケーション機能」を実際の自然談話に即して考察した後に表1の分類を提案している。宇佐美は、ポライトネス理論の視点から、伝統的な終助詞研究の射程外にあった話し手中心用法をも取り込んだ「ね」の体系的分類を提案した点は高く評価できるものの、先行研究で中心的な位置を占めていた(話し手と聞き手の)共有知識を前提とする相互作用の用法と共有知識を必ずしも前提とはしない話し手中心用法が、同じ終助詞の用法として、矛盾無く共存できるのはなぜかという問題は考察の対象としていない。「ね」の一面矛盾している諸機能を統一的に理解することを目指す研究は、「ね」の運用面における機能の研究とくらべると遙かに数が少ないのが現状である⁵⁾。

本稿の目的は、終助詞「ね」の中心的機能及び運用面における機能を統一的に説明する仮説を提案することであるが、第4節で提出する「ね」の統一的な分析の基礎として、Sweetser(1990)による英語の従属接続詞の分析を次節で解説する。

3. Sweetser (1990) の3層モデル

Sweetser (1990) は逆接・順接の従属接続詞 (*because, although*) と等位接続詞の多様な用法を検討し、これらの接続詞が示す見かけ上の多義性は接続詞が適用される意味的領域の相違(「内容領域」⇔「認識領域」⇔「発話行為領域」)から語用論的に派生していると提案している⁶⁾。本節では、Sweetserによる英語接続詞の分析を例文(3a)–(3c)に基づいて具体的に説明する(Sweetser 1990: 77)。

- (3) a. John came back, *because he loved her*.
 b. John loved her, *because he came back*.
 c. What are you doing tonight, *because there's a good movie on?*

例文(3a)において主節と従属節を繋いでいるのは現実世界の因果関係である。即ち、ジョンが彼女に対して持っていた愛情のために、ジョンは戻ってきたのである。一方、例文(3b)は、ジョンが戻ったことが、彼が彼女への愛情を抱くに至った理由であると解釈できぬことも無いが、ジョンが戻ったという知識に基づいて、話し手がジョンは彼女を愛していたという結論に到達したと解釈する方が一般的である。

最後に、例文(3c)における主節と従属節の間の因果関係を現実世界で考えるのは、主節が平叙文ですらないため、不可能である。むしろ、*because*で始まる従属節が、主節が体現する発話行為を可能にしたと考えるべきである。例文(3c)を言い換えると、“I ask what you are doing tonight because I want to suggest that we go see this good movie”のようになる。Sweetserは上で言及した(接続詞が適用される)3つの意味的領域をそれぞれ内容領域、認識領域、発話行為領域と名づけている。

例文(3a)–(3c)に見られる語用論的曖昧性は同一の文の中でも作り出すことが可能であることをSweetserは指摘している。たとえば、例文(4)を考察してみよう。

- (4) She went, *because she left her book in the movie theater last night*.

Sweetser (1990: 77)によれば、例文(4)を、彼女の出発とそれに後続して出発の理由(置き忘れた本を探しに帰る意図)が述べられていると解釈しても差し支えない。また、このような現実世界の因果関係ではなく、彼女が映画館に本を置き忘れたという知識から、彼女が映画館へ向かったという結論を導き出していると解釈することもできる。

Sweetserは、例文(3a)–(3c)に見られるような異なる用法を、各々異なる語義に帰着させるのではなく、語用論的曖昧性(Horn 1985)として扱うことを提案している。すなわち、

接続詞の語義は変わらないが、言語的・状況的文脈に応じて最終的解釈が決定されるのである。以下の第4節で「ね」の統一的な分析を提出する際に、Sweetser (1990) が提案した内容領域、認識領域、発話行為領域の3分法を援用する。

4. 提案：「ね」の語用論的曖昧性

本節で提案する「ね」の分析は(5)-(6)のように要約される。以下では、内容領域の「ね」、認識領域の「ね」、発話行為領域の「ね」の順序で考察する。

- (5) a. 内容領域に適用される「ね」(=相互作用の用法)
- b. 認識領域に適用される「ね」(=発話内容確認用法)
- c. 発話行為領域に適用される「ね」(=話し手中心用法)

(6) 助詞「ね」の語用論的曖昧性

「ね」の意味は単一(確認)であるが、「ね」の具体的な解釈(確認を行う対象となる領域の同定)は文脈に応じて語用論的に決定される。

4.1. 内容領域の「ね」

内容領域に適用される「ね」は、話し手が自分と同様の情報を聞き手が持っていることを想定して使う用法であり、伝統的な研究で「確認」と呼ばれてきた用法に相当する。話し手が聞き手との間で共有していると想定する情報は、話し手が聞き手の心の中に存在すると想定する(2a)のような言語的情報でも、(7)のやり取りが示すように、目の前の現実世界から視覚的に得られる情報でも差し支えない。

(7) 買い物客：この魚はいくらですか。

店員： 六百元ですね。(値札を客と共に確認しながら)

これまで数多くの研究が「確認」用法について蓄積されてきたが、以下においては、「よ」、「裸の文末形式」(上原・福島2004)とのコントラストも踏まえながら、認知文法の「ステージ・モデル」(Langacker 1985, 1991)に基づく「ね」の分析を提示することで、Sweetser (1990)の枠組に基づいた(5)-(6)の提案を具体化することを目指す。

ステージ・モデルは、認識主体、認識客体、及び「意味スコープ」(単語の意味に相当)から構成される。認識主体(話し手/聞き手)及び彼らの直近の場は「グラウンド」(「共有基盤」に相当)と呼ばれる。意味スコープはプロファイルされる部分(オンステージ領域)とプロファイルされない部分(オフステージ領域)に二分される。認識主体と認識客体は、通常分離されているが、一部のダイクシスやモダリティ表現、明示的遂行文(例：I order you

to go to the station) は、認識主体が認識客体の一部を構成する主観的表現として機能している (Langacker 1985, 1990)。

終助詞「ね、よ」は共に話し手の発話時の判断を反映するモダリティ表現であるが、「ね」においては、話し手と聞き手の双方が、意味スコープ内の参照点として機能し、共通の事態を認識しているのに対して、「よ」では、「話し手」のみがある事態を認識しているという相違がある。図1 (a,b) は内容領域の「ね、よ」の意味構造を表している。

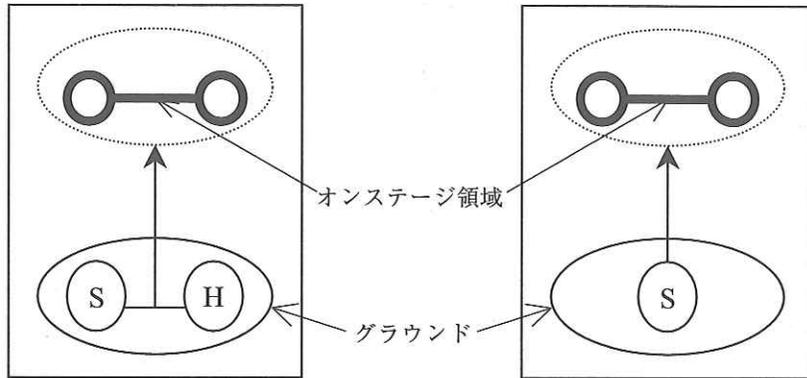


図1 (a) : 「ね」の意味構造

図1 (b) : 「よ」の意味構造

図1 (a,b) の長方形は、「ね」、「よ」の意味スコープにそれぞれ相当している。点線で囲まれた上部の楕円は認識客体を表している。楕円の中は文が描写する事態を表しているが、オンステージ領域にあるため太線で表示されている。他方、実線で囲まれている下部の楕円はグラウンドを表すが、「ね」の場合は、話し手及び聞き手が、「よ」の場合には話し手だけがグラウンドを構成する⁷⁾。話し手 (S)、聞き手 (H) から認識客体へ向かう矢印付きの直線は認識主体の事態把握を示している。

図1 (a) は、話し手と聞き手の双方がある事態を同時に認識していることを表している。グラウンド内において話し手、聞き手双方のパーstekティブを並置する、こうしたモデルは、否定文 (例: Mary is not happy) や譲歩を表す接続詞の意味的構造を分析するために、Verhagen (2005) が提案したものであるが、本稿は話し手・聞き手がある事態・事物を同時に認識する「間主体的並置 (intersubjective coordination)」 (Verhagen 2005) が「ね」を用いる話し手の心の中にも存在すると仮定する⁸⁾。

「ね」の分析を主な目的とする本稿では、「よ」の意味構造及び機能に詳細な検討を加えることは不可能であるが、図1 (b) に素描した「よ」の意味構造では、グラウンド内に聞き手が存在しない。これは、従来の研究が、「ね」とのコントラストにおいて「よ」に与えてきた定義、たとえば、「伝達」 (野田 2002)、「排他的知識管理」 (加藤 2001; cf. Lee 2007)、「談話

場外認識」(松岡 2003) にほぼ対応したものである。

グラウンドが意味スコープ内のオフステージ領域にある「ね、よ」で終わる文とは対照的に、終助詞や接続助詞(例：が、けど)を伴わない普通体の裸の文末形式は、以下の図1(c)が示すように、グラウンドが意味スコープの外部にあると考えられる。

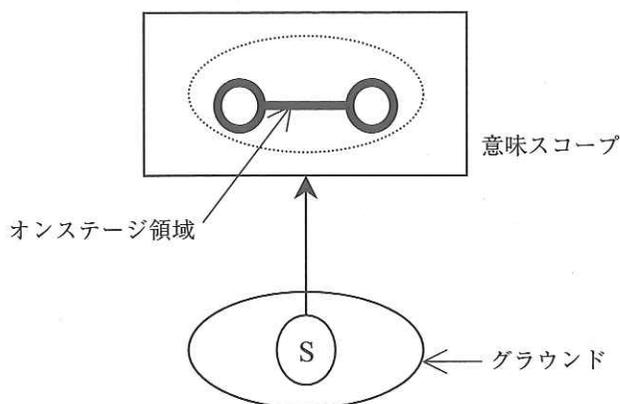


図1(c)：普通体の裸の文末形式の意味構造

話し手のみから構成されるグラウンドが意味スコープの外にある図1(c)は、普通体の裸の文末形式が用いられるのは、聞き手を意識しない状況での独話や回想、聞き手に対する待遇意識が一時的に消滅する状況(例：状況と向きに対応して、瞬時に行う発話)であるという上原・福島(2004)の指摘と符合する。

(8)は裸の文末形式(下線部)の具体例だが、「聞き手を意識しない」、「(聞き手への)待遇意識が一時的に消える」という観察は、図1(c)が表示するような話し手が自分と聞き手の相互交渉を意識しない事態把握に対応していると考えることが出来る。

(8) 太郎：大学へ来てね。

次郎：うん、行く!

4.2. 認識領域の「ね」及びその拡張

本小節は認識領域の「ね」を考察する。この用法は、宇佐美(1997)の機能的分類では、相互作用的用法にも話し手中心用法にも分類されなかった発話内容確認の「ね」の用法に相当する。発話内容確認の「ね」は、田窪・金水(2000)では、当該の命題の妥当性が再計算中であることを示す標識と形容されている。

(2) d. 発話内容確認

例：①えーと、それから 250 も、今日、初めてでございますよね。

②えーと、じゃあ、いちよ、ちょっと、説明したほうがいいですよね。

第1節の例文を再掲した上の2つの例文は、共に「よね」で終わる点が目を引くが、例文(9a)のような「よ」を伴わない「ね」の用法も存在する(宇佐美 1997: 253)。

(9) a. じゃあ、2通、あればいいとゆうことですね。

b. じゃあ、2通、あればいいとゆうことですよね。

宇佐美による定義は「話し手が自分の発話の内容に確信を欠く場合に、聞き手に確認する」用法となっているが、「よね」も先行研究(金水・田窪 1998: 269)ではほぼ同様の分析を受けていること、(9b)のように、「ね」の前に「よ」を挿入しても、文の意味や適格性が変わらないことから、発話内容確認の「ね」は、「確認」という基本的意味の他、「よ」が表すような話し手の推論も意味の一部として持つことがわかる。

発話内容確認用法の「ね」が「よね」と交替可能であることから、発話確認用法の「ね」は、確認の意を含んではいるが、そこで確認されているのは、宇佐美(1997)のタームである「発話内容確認」が示唆するような客観的事態ではなく、話し手が遂行する判断／推論過程が聞き手に共有されているかどうかの確認であるということが出来る。図2はこの認識領域の「ね」の意味構造を表している。

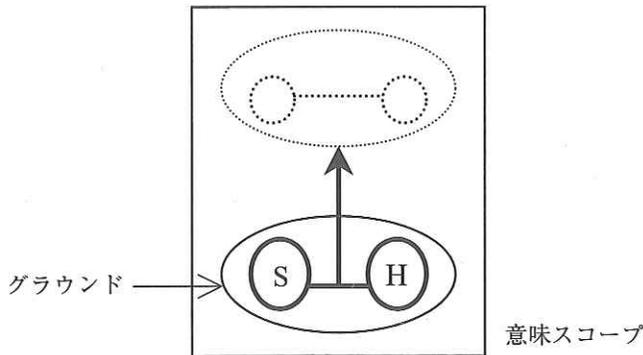


図2：認識領域の「ね」の意味構造

図2では、図1(a,b)と異なり、認識客体の事態はスキーマとして存在するだけである。このことは、認識客体に相当する図2の上部の楕円の中を点線で表示することにより表されている。認識領域の「ね」の実質的な意味は、話し手と聞き手が構成するグラウンド及びグラ

ウンドからスキーマ的な事態へと伸びる推論が担っている。

こうした主体化のプロセスが一層進展すると、例文 (10a) に例証される「ね」の強意用法、例文 (10b,c) に例証される「ね」の呼びかけ用法が現れる⁹⁾。

- (10) a. やっぱり来て良かった、**ね**！
 b. **ねえ**、ちょっとこっちに来てくれる？
 c. **ね**、私の言うこと、聞いているの？

(10a) の文末の「ね」は、先行する「やっぱり来て良かった」を意味的に承けているが、(10b,c) の「ね」の用法は注意喚起機能を持つのみであり、先行文脈によっては、意味的に承けている要素（具体的には、現実世界の事態とその事態に下される推論・判断）さえ見出せないことがある。

以上の観察を踏まえて、例文 (10a), (10b,c) が例証する「ね」の用法の意味構造は、それぞれ図3 (a), 図3 (b) のように描くことができる。

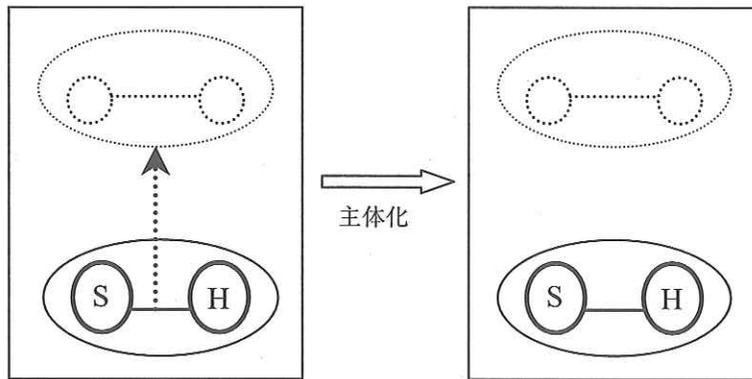


図3 (a) : 強意の「ね」の意味構造

図3 (b) : 呼びかけの「ね」の意味構造

図3 (a) において共有が確認されているのは、スキーマ化された推論のプロセス及び認識客体であるが、その両者が共に消失した図3 (b) において、確認がなされているのは、話し手と聞き手が共通のグラウンド内に居るかどうのみである。

本小節は、発話内容確認の「ね」(宇佐美 1997) を認識領域の「ね」として定義し直し、内容領域の「ね」から主体化を経て派生する認識領域の「ね」から、従来は、終助詞の「ね」と統一的に記述されることがなかった強意の「ね」及び呼びかけの「ね」の用法が主体化を通じて派生する過程を分析した。これら3つの用法は主体化の程度及び文内の生起位置こそ異なるものの、語義の意味はあくまで「共有/共在」である。

4.3. 発話行為領域の「ね」

最後に、発話行為領域の「ね」を考察する。宇佐美（1997）の分類では、話し手中心用法に分類された注意喚起／発話埋め合わせ用法に相当している。以下の（11a,b）は、その2つの用法の例文の一部を再掲したものである。

(11) a. 注意喚起用法

ほんとに速読する人はね、岩波新書はね、2時間で読まなきゃいけないんだよね。

b. 発話埋め合わせ用法

えー、にゅ、入稿はですね、2回ぐらいに分けたいというふうに思っております。

本小節では、宇佐美（1997）の議論に即して第2節で述べたように、発話埋め合わせ用法を下位タイプとして含む注意喚起用法の分析を提案する。

注意喚起用法の「ね」の最大の特徴は、語末・句末のような文の統語上・意味上の切れ目に現れる間投助詞としてのふるまいである。修飾対象としての節・文の存在を前提としない「ね」の用法は、修飾対象としての節を前提とする内容領域の「ね」、認識領域の「ね」とは一見相容れないように見える¹⁰⁾。

注意喚起用法の「ね」が（11a）で行っていることは、「ね」が付いた語・句の意味を話し手と聞き手の間で逐一確認することである。ここで、話し手、聞き手に加えて、発話の認識過程（C）も、図4が示すように、グラウンド内に含まれ得ること（Langacker 1985: 130）、「ね」によって区切られた断片的な発話の指示対象（例：「ほんとに速読する人」、「岩波新書」）は、オンステージ領域で逐一プロファイルされていることを考慮すると、注意喚起用法の「ね」は、図4に示されたグラウンドを、オンステージ領域でプロファイルする意味構造を持つと考えることが可能である¹¹⁾。

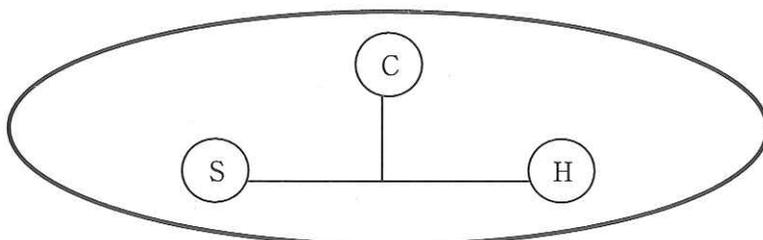


図4：グラウンドの構成要素（Langacker 1985: 130 を一部修正）

(12) は、注意喚起用法の「ね」に関する本稿の提案である。

(12) 発話行為領域の「ね」の意味構造

文の統語上・意味上の切れ目に挿入される間投助詞としての「ね」は、話し手・聞き手・言語表現を含むグラウンド（共有基盤）の直示表現として機能し、「ね」が付いた語や句の意味内容をグラウンドに導入してグラウンド全体をオンステージ領域に入れる。

内容領域の「ね」と発話行為領域の「ね」の共通点は、何らかの事物又は事態を確認しようとしている点に求められる。一方、両者の相違点は、確認の対象が、前者ではグラウンドから区別された客観的事態であるのに対して、後者はグラウンド内にある発話の断片の認識過程である点である。図5は、発話行為領域の「ね」の意味構造であるが、話し手・聞き手を指示する円が点線で描かれているのは、両者が発話の中で明示的に言及されていないからである。

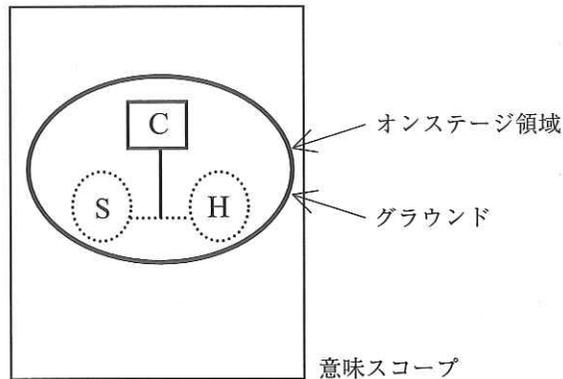


図5：発話行為領域の「ね」の意味構造

発話行為領域の「ね」は、聞き手が、例文(11a)のような断片的発話を逐次的に追認する作業を文が完結するまで促す用法であるため、結果として聞き手が発話の順番を取ることを促進する機能を持つ(宇佐美 1997: 250; cf. Tanaka 2000) ことも自然に説明できる。たとえば、例文(11a)の話し手は、「ほんとに速読する人は」、「岩波新書は」という発話の断片を逐次的に聞き手に向かって呈示し、聞き手がその断片を一つ一つ話し手と一緒に理解するのを確認しながら文を言い終えている¹²⁾。同じ観察は、例文(11b)のような発話埋め合わせ用法についてもそのまま当てはまる。

最後に、本節を要約すると、(13)のようにまとめることができる。

(13) 助詞「ね」の用法の下位タイプ

- a. 内容領域の「ね」
- b. 認識領域の「ね」⇒強意の「ね」⇒呼びかけの「ね」
- c. 発話行為領域の「ね」

(13a,b)は、基本的には終助詞／文末助詞としての用法であり、両用法の相違は文脈を踏まえて語用論的に決定されるが、文末に一定のポーズを置いた後で、直前の発話を繰り返すために生じる強意用法の「ね」、発話冒頭に生じる呼びかけ用法の「ね」は、発話行為領域の「ね」と同様に間投詞として機能している。両用法には、文末（終助詞）⇔文中／文頭（間投詞）という統語的な相違が存在するが、文中／文頭に生じる間投詞としての「ね」の用法は、文全体を作用域に入れるモダリティとしての意味・機能を持ちえないことを考えると、これらの用法を別々の語義の意味として措定する必要は無いことが分かる¹³⁾。

5. 「よ」の間投助詞用法の分析

第4節で提示した注意喚起用法の「ね」の分析は「よ」の間投詞としての用法にも適用できる¹⁴⁾。これらの間投詞用法の「よ」は、図6が示すように、注意喚起用法の「ね」と同様に、グラウンド内の話し手をダイクシスとして間接的に指示している。

- (14) a. 太郎が^よ、図書館まで来いってよ。
- b. 太郎がさ、この重い本を^よ、明日持って来いってよ。

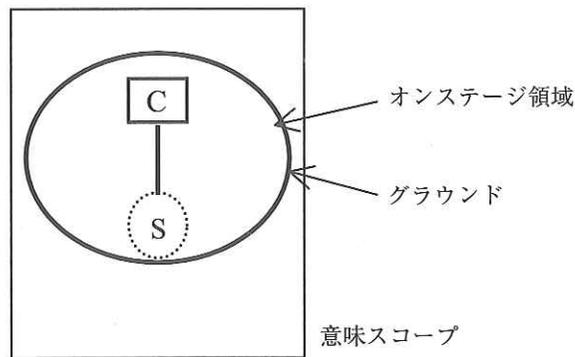


図6：発話行為領域の「よ」の意味構造

図5のグラウンドの構成要素(S, H, C)から聞き手(H)の存在を削除したものが、図6に相当するが、図5と図6はそれ以外の点では同じであり、「よ」の間投詞としての用法は「ね」の間投助詞としての用法と同型の意味構造を持つ¹⁵⁾。

6. 結論

本稿では、終助詞「ね」の先行研究を概観し、伝統的な研究が言い当てた「ね」の基本的用法に該当しない様々な用法を「ね」の機能として列挙・記述する近年の研究を宇佐美(1997)の要約を通じて批判的に検討した。こうした作業を踏まえて、第4節で、第3節で要約したSweetser(1990)による英語従属節の分析を援用して、「ね」の多様な用法を、内容領域、認識領域、発話行為領域の3タイプに整理した。こうした3つの下位タイプを認知文法のステージ・モデルを用いて具体的に記述し直す中で、先行研究が終助詞の「ね」と共に記述してこなかった「ね」の2つの下位タイプ(強意の「ね」、呼びかけの「ね」)も統一的に記述することが可能になった。上の図7の上半分は、左から順に、内容領域の「ね」、認識領域の「ね」、発話行為領域の「ね」の意味構造であり、下半分は、左から順に、認識領域の「ね」から主体化を経て派生した強意の「ね」、呼びかけの「ね」の意味構造である。

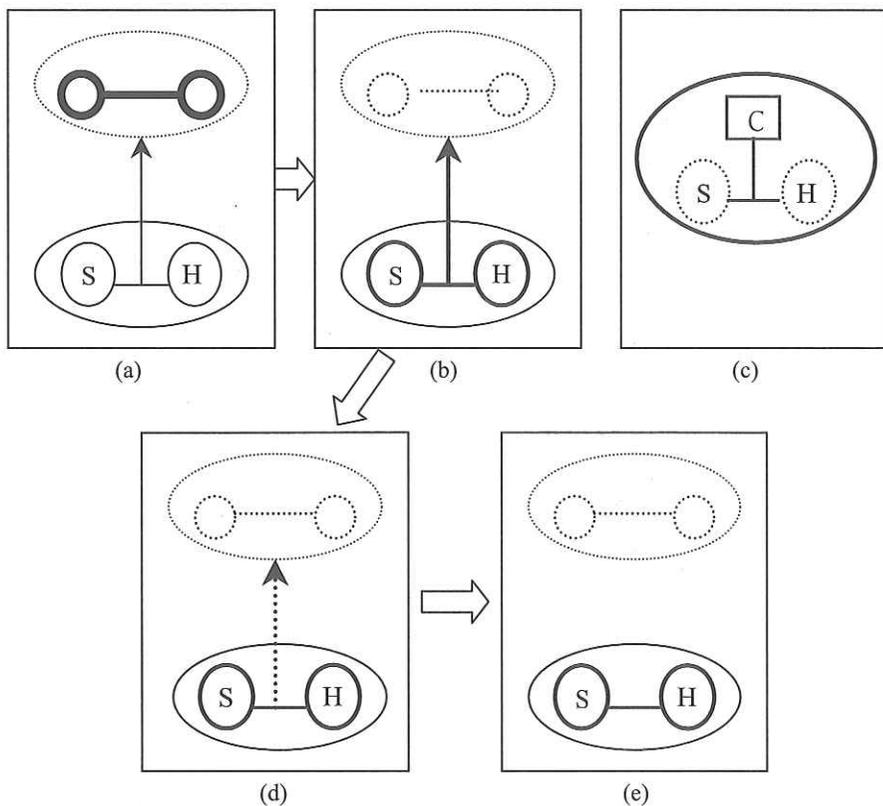


図7: 「ね」の3つの用法(内容領域⇔認識領域⇔発話行為領域)

第4節で述べたように、強意の「ね」と呼びかけの「ね」は、認識領域の「ね」から主体化を経て派生されている。内容領域の「ね」から認識領域の「ね」、認識領域の「ね」から強意の「ね」、そして、強意の「ね」から呼びかけの「ね」の意味構造へ向かう合計3本の矢印(⇨)は主体化の進展を表している。

第4節の議論と表1を踏まえて、宇佐美(1997)の「ね」の機能的分類と図7にまとめた「ね」の各用法の意味構造の対応関係を整理すると、表2のようになる。

表2: 「ね」の機能的分類と意味構造の対応関係

	宇佐美(1997)の分類	Sweetser(1997)の分類	意味構造
1. 会話促進	相互作用的	内容領域	図7(a)
2. 注意喚起	話し手中心	発話行為領域	図7(c)
3. 発話緩和	聞き手中心	内容領域	図7(a)
4. 発話内容確認		認識領域	図7(b)
5. 発話埋め合わせ	話し手中心	発話行為領域	図7(c)

本稿で提示した分析で最も肝要な所は、「ね」の用法の根本的意味は、グラウンド内にある言語表現の認識主体としての話し手と聞き手が共に存在することに求められる。図7にまとめられた5つの図に即して言えば、呼びかけの「ね」の意味構造である図7(e)が、「ね」の意味構造を最も簡明に捉えたものである。こうした話し手と聞き手の原基的な共在性/共軌性に加えて、事態及び推論の確認(図7(a))、推論の確認(図7(b))、断片的発話の逐次的な確認(図7(c))、そして強意の「ね」の意味構造に相当する前方照応的な(スキーマ的な)事態・推論の確認(図7(d))が言語的そして/または状況的文脈に応じてつけ加わることになる。

最後に、今後の課題として以下の2点を挙げることができる。まず、第4節で提案した「ね」の類型論を、本稿では扱えなかった自然発話資料に即して、より広く検証することである。その検証作業を行う際には、許(2002)や松岡(2003)等が試みている作例に基づいて「ね」の共起関係の有無を調べる作業も有効であろう。更に、本稿のアプローチを他の終助詞兼間投助詞の談話辞、特に、本稿では全く不十分な考察しかできなかった「よ」に拡張する課題が残されているが、それらの課題への取り組みは別稿に譲ることにしたい。

注

- 1) 神尾(1990)は聞き手の領域(なわ張り)に属する情報に言及する際に、話し手は「ね」を義務的に用いる必要があると述べている。なわ張り理論を修正・発展させた神尾(1998)では、これらの必須の「ね」と対立関係にある任意の「ね」(例:それは六百元です^ね)の下位タイプとして、強調(強意)の「ね」(例:良い曲だろ、^ね)、疑問の「ね」(雪降りますか^ね)を指定しているが、必須

- の「ね」と任意の「ね」の並立/対立は解消されていない。
- 2) Brown and Levinson (1987: 147) は、「ね」を 'Don't presume/assume' という消極的な ポライトネス・ストラテジーを体現する、発話内的力に付く緩和標識と分析しているが、彼らの主張への反論と反例については、Itani (1992) を参照されたい。
 - 3) 益岡 (1991: 103-104) は、(2c) の「ね」の用法を「擬似的一致型の判断」と名づけ、一致型の判断を表す用法と間投詞用法の「ね」の中間に位置すると主張している。
 - 4) Lee (2007) は、宇佐美 (1997) と同様に、話し手と聞き手の相互作用に注目して、Gumperz (1982) の「関わりあい」概念に基づく「よ」「ね」の分析を提案している。彼の提案の骨子は、両助詞は「関わりあい」を体現しているが、「よ」は「独占的」、「ね」は「統合的」である点で、異なっているというものである。しかし、Lee (2007) は、注意喚起の「ね」の(間投助詞としての)用法に言及していない。また、「関わりあい」という共通点を仮定した上で、「よ、ね」に対立する機能を振り当てる相補的なアプローチでは、「よね」表現が可能である理由を説明することも難しい (cf. 田窪・金水 2000: 267-269)。
 - 5) Itani (1992: 225-227) は、「ね」を、発話が伝える想定(表意と含意の双方)を聞き手との共有基盤にしたいという話し手の意向を示す標識であると分析している。Itani の定義は、話し手と聞き手の共有情報の有無に関わらず、「ね」の諸用法を一元的に扱うことを可能にする点で望ましく思えるが、共有願望が無いにも関わらず、「ね」が文末に付いた例(例:「君は否定するけれど、本当に思いやりがない[ね]」)を説明することはできない (cf. 加藤 2001: 36-37)。談話管理理論を採用する田窪・金水 (2000: 277) も、「ね」を「当該の命題の妥当性を計算中であるという標識」と一元的に定義しているが、定義の適用対象は命題を作用域に入れる「ね」の終助詞としての用法に限定されており、間投詞としての「ね」の用法を考慮に入れていない点で問題がある。
 - 6) Sweetser (1990) の英語従属節の分析の批判的検討については、Lang (2000) を参照されたい。
 - 7) 図1 (a,b) は話し手のメンタルモデルであり、客観的な現実世界ではない。それ故、話し手と聞き手が直近の場に居る時でも、聞き手が、図1 (a) が示しているように、話し手と同様にグラウンドの一部として認識されるかどうかは、話し手の心的な態度や文脈に応じて決定される。
 - 8) 図1 (a,b) に見る「ね」と「よ」の非対称性は、「ね」は「よ」に後続することはあっても、その逆はないという統語上の非対称性に対応している。なお、図1に見られるような話し手・聞き手 ⇄ 話し手 ⇄ 聞き手の対立は、人称の概念で言えば、包含的1人称複数 ⇄ 1人称単数の対立に例えることができる。
 - 9) 「ねえ」は「ね」の音韻論的変異体と見なす。本稿で触れる余地が全くなかった「ね」のイントネーションについては、森山 (2001) や杉藤 (2001) を参照されたい。
 - 10) 宇佐美 (1997) と同様に、「ね」の機能に注目した伊豆原 (1993) は間投詞の「ね」は「持ちかけ」という機能を有すると述べている。伊豆原 (1993) や宇佐美 (1997) を含めて、「ね」の運用面に注目した研究は、「ね」が文脈の中で示す様々な効果を「機能」の名のもとに列挙することに専念する傾向が強いが、「持ちかけ」(伊豆原 1993) と「注意喚起」(宇佐美 1997) のどちらが「ね」の間投詞用法の機能を表すのに優れているとも決め難い。こうした機能の目録作成作業は、結果として「ね」の全用法の背後にある共通性を同定する作業を妨げることになる。
 - 11) グラウンドは話し手・聞き手が共同作業を通じて主体的に生み出すものであり、客観的・物理的な場ではない。図4が示すように、認識過程(C)が話し手・聞き手に加えてグラウンドの構成要素となる場合もあるが、話し手・聞き手のみがグラウンドを構成する場合(図1 (a))、最後に、話し手のみがグラウンドを構成する場合(図1 (b,c))もある。

- 12) 宇佐美 (1997) は、例文 (11a) の文末に生じる「ね」も注意喚起の「ね」と分類しているが、ここでは自己確認の「ね」(内容領域の「ね」)に分類しておく。
- 13) 「ね」は、「ね」が付く統語範疇について不完全指定されていると考える。
- 14) 本稿では例文 (14a,b) の文末に生起している「よ」は終助詞用法であり、図 1 (b) に表されたような意味構造を持つと想定する。
- 15) 「ね、よ」以外の間投助詞「さ、な」の用法と対応する終助詞の用法も、本稿で提案した内容領域と発話行為領域の語用論的曖昧性を導入することで統一的な記述を与えることが可能ならずである。間投助詞について従来なされた研究は数が少ないが、たとえば、富樫 (2004) を参照されたい。

参考文献

- Brown, P. and S. C. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gumperz, J. J. 1982. *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press. [井上逸兵他 訳 2004. 『認知と相互行為の社会言語学——ディスコース・ストラテジー』東京: 松柏社]
- Horn, L. R. 1985. "Metalinguistic Negation and Pragmatic Ambiguity." *Language* 61: 1, 121-174.
- Itani, R. 1992. "Japanese Sentence-Final Particle NE: a Relevance-Theoretic Approach." *UCL Working Papers in Linguistics* 4, 215-237.
- 伊豆原英子. 1993. 「「ね」と「よ」再考——「ね」と「よ」のコミュニケーション機能の考察から」、『日本語教育』80号、103-114.
- 神尾昭雄. 1990. 『情報のなわばり理論——言語の機能的分析』東京: 大修館書店.
- 神尾昭雄. 1998. 「情報のなわ張り理論——基礎から最近の発展まで」、中右実 (編) 『談話と情報構造』(日英語比較選書)、第2巻、1-111、東京: 研究社出版.
- 加藤重広. 2001. 「文末助詞「ね」「よ」の談話構成機能」、『富山大学人文学部紀要』35号、31-48.
- 金水敏・田窪行則. 1998. 「談話管理理論に基づく『よ』『ね』『よね』の研究」、堂下修司・白井克彦・溝口理一郎・新美康永 (編) 『音声による人間と機械の対話』、257-271、東京: オーム社.
- 許夏玲. 2002. 「話し言葉における文末表現と終助詞「ネ」「ヨ」の共起関係——「ネ」「ヨ」が付かない文末表現を中心に——」、『言葉と文化』(名古屋大学大学院国際言語文化研究科)、3号、111-126.
- Lang, E. 2000. "Adversative Connectors on Distinct Levels of Discourse." In Elizabeth Couper-Kuhlen and Bernd Kortmann (eds.) *Cause, Condition, Concession, Contrast: Cognitive and Discourse Perspectives*, 235-256. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, R. W. 1985. "Observations and Speculations on Subjectivity." In J. Haiman (ed.) *Iconicity in Syntax*, 109-150. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Langacker, R. W. 1990. "Subjectification." *Cognitive Linguistics* 1:1, 5-38.
- Langacker, R. W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar: Descriptive Applications*. Stanford, CA.: Stanford University Press.
- Lee, D-Y. 2007. "Involvement and the Japanese Interactive Particles *ne* and *yo*." *Journal of Pragmatics* 39:2, 363-388.
- Lee-Goldman, R. 2005. *Claiming Your Territory: Discourse Strategies in Japanese*. Unpublished Senior Honors Thesis. University of California at Berkeley.
- 益岡隆志. 1991. 『モダリティの文法』東京: くろしお出版.
- 松岡みゆき. 2003. 「談話場における終助詞ヨの機能」、『言葉と文化』(名古屋大学大学院国際言語文化

- 研究科)、4号、53-69.
- 泉子・K・メイナード. 1993. 『会話分析』東京:くろしお出版.
- Morita, E. 2002. "Stance Marking in the Collaborative Completion of Sentences: Final Particles as Epistemic Markers in Japanese." In Noriko M. Akatsuka and Susan Strauss (eds.) *Japanese/Korean Linguistics*, vol.10, 220-233. Stanford, CA.: CSLI Publications.
- 森山卓郎. 2001. 「終助詞「ね」のイントネーション」、音声文法研究会(編)『文法と音声Ⅲ』、31-54、東京:くろしお出版.
- 野田春美. 2002. 「終助詞の機能」、宮崎和人他(編)『モダリティ』(新日本語文法選書)、第4巻、261-288、東京:くろしお出版.
- 大曾美恵子. 1986. 「誤用分析1「今日はいいい天気ですね。」——「はい、そうです。」」、『日本語学』5巻9号、91-94.
- Onodera, N. O. 2004. *Japanese Discourse Markers*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- 杉藤美代子. 2001. 「終助詞「ね」の意味・機能とイントネーション」、音声文法研究会(編)『文法と音声Ⅲ』、3-16、東京:くろしお出版.
- Sweetser, E. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 田窪行則・金水敏. 2000. 「複数の心的領域による談話管理」、坂原茂(編)『認知言語学の発展』、251-280、東京:ひつじ書房.
- Tanaka, H. 2000. "The Particle *ne* as a Turn-Management Device in Japanese Conversation." *Journal of Pragmatics* 32:9, 1135-1176.
- 富樫純一. 2004. 「終助詞・間投助詞の「さ」に関する覚え書き」第74回 関東日本語談話会口頭発表(学習院女子大学.)
- 上原聡・福島悦子. 2004. 「自然談話における「裸の文末形式」の機能と用法」、『世界の日本語教育』14号、109-123.
- 宇佐美まゆみ. 1997. 「『ね』のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス」、現代日本語研究会(編)『女性のことば・職場編』、241-268、東京:ひつじ書房.
- Verhagen, A. 2005. *Constructions of Intersubjectivity: Discourse, Syntax, and Cognition*. Oxford: Oxford University Press.